
スープ嫌い

小出 あかり

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

スープ嫌い

【Nコード】

N4239C

【作者名】

小出 あかり

【あらすじ】

食卓にスープが並ばなければ気が済まない主人公・梨々子。ある日の食卓で、恋人が『スープ嫌い』であることが判明する。2人の食卓には、嵐が待ち受けていた……。

今日のスープは、トマトのポタージュ。独特の酸味、とろりとした触感。梨々子は熱いスープを飲んで、ホツと一息ついていた。うん、いい感じ。

我ながら、今日もいい味だ。

目の前にすわる彼氏の聡一に、梨々子は何げない言葉を投げかけた。

「スープを飲むと、ごはん食べたって気がするよね」

しかし聡一からは、何のコメントもない。

テレビ画面に釘付けだった。

ニュースのプロ野球速報に耳を傾けながら、ご飯にのせためんたいこをつついてる聡一は、梨々子の方さえ見向きもしない。

やがてテレビはCMに入り、しばらくしてから聡一が振り向いた。

「え？ 何？ 何か言った？」

梨々子はちようど、サバの塩焼きをつついていたところだった。

そして数分前、自分が言ったことすら忘れかけていた。

「何が？」と梨々子。

聡一はまた聞いた。

「何か言わなかった？ スープがどうか」

梨々子は自分の言ったことを思い出そうと、記憶の断片を拾いはじめた。しかし、やっぱり何を言ったのか思い出せない。

別にたいしたことじゃない。

ただ、何となく言っただけだ。

どうせ、忘れるようなことなのだ。

かわりに梨々子は、別のことを言うことにした。

「聡一はさ、どんなスープが好きなの？」

「えっ？」

聡一の手が止まる。

「うーん……」

ひとしきり悩んだ末、聡一はご飯の上のめんたいこをもてあそびながら、こう言った。

「僕さ、ネコ舌なんだよね」

梨々子は驚いて聡一を見る。

「そんなこと、聞いたことないよ？ 聡一がネコ舌なんて」

聡一は首をかしげて笑った。

「あれ？ 知らなかった？ だから鍋焼きうどんも苦手なんだ」
初めて知った、恋人の新事実。

梨々子は思った。2年も付き合っていて、聡一の何を見ていたんだろう？

梨々子はつぶやいた。

「そうか、熱いのが苦手なんだ」

梨々子は、頭の中で考えをめぐらせていた。

今度の晩ごはんには、冷たいスープを作ろう。ジャガイモのポタージュ、コンソメスープ、トマトのスープ、ほうれん草の緑のスープ。梨々子の頭の中には、さまざまなレシピが浮かんだ。

そして……。

そうだ、ニンジンにしよう！

梨々子は決めた。

暑い夏には、これが一番。不足しがちな緑黄色野菜も、これでバツチリ摂取ね。

梨々子は、聡一を見てニッコリ笑う。

「？ なんだよ？」

聡一は、イミが分からない、といった表情で梨々子を見返した。

梨々子はスープが大好きだ。

一番好きなのは『味噌汁』。日本食が好きな梨々子は、味噌汁が大好きだった。特に好きなのは、豆腐とネギの具が入ったカツオだしの赤味噌。タケノコとワカメの組み合わせも大好物だ。

そして二番目に好きなのはポタージュスープ。ポターシユならカボチャだろうが、トウモロコシだろうが、何でも来い、という感じだった。

梨々子は何でもかんでもミキサーにかけては、ポタージュスープにしてしまう。最近は、牛乳のかわりに豆乳でつくるのがマイブームだった。

スープは梨々子にとって、『癒し』だった。

スープがあるのは、『あたりまえ』。

スープのない食事など、翼のない扇風機だと、梨々子は思っていた。

今は夕方。

『晩ごはん』のために、梨々子は料理の下ごしらえをしていた。

今、ニンジンと鍋でゆでている。

まだ、もう少し時間がかかりそうだ。

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「梨々子、いる？」

聡一だった。

ガチャリと鍵をあけた梨々子は、入り口に立つ聡一に言う。

「合鍵持つてるんだから、チャイム鳴らさなくていいよ」

そして梨々子は、もう一言つけ加えた。

「ウチに来るの、早くない？」

聡一は、梨々子のアパートの近所に住んでいるのだ。いつしか聡一は、晩ごはんのたびに、梨々子の家に上がり込むようになった。そしてその状況はエスカレートしていき、最近では梨々子がいなくても、部屋に勝手にあがりこむことも多くなっていた。

聡一のお目当てはゲームだ。

ついこの間、梨々子は新型ゲーム機を買った。今聡一は梨々子が買ってきたRPGで遊んでいる。梨々子のメモリの隙間には、聡一のデータがこっそりセーブされており、聡一は毎日ちよつとずつ遊んでは、キャラを育てていた。

梨々子がバイトでない時、聡一はゲームをする為に家にあがりこみ、そして一人でゲームをして帰るのだった。梨々子はそれを容認していた。梨々子と聡一は、そんな仲なのだ。遊んでいる聡一の背中に向かい、梨々子が呼びかけた。

「今日は、特別メニューだよ」

「ああ、もしかして肉料理？」

聡一が、妙にうれしそうに聞いた。

「バカ。ダイエット中で金欠の私が、肉なんか買ってくるわけないでしょ」

「へええ、じゃあ何？」

「冷たいスープだよ」

それを聞いた聡一は、梨々子の方を振り返り、顔をゆがめて言った。

「えっ？ スープ？」

そして聡一は、

「あのさ、梨々子。僕は冷たすぎるのも苦手なんだ」と言った。

梨々子の手が止まる。

「冷たいのも、ダメなの？」

今しがたミキサーですり潰したばかりのニンジンを見つめながら、梨々子は言った。

「じゃあ、冷蔵庫で冷やすのはやめにする」

そしてかわりに冷蔵庫を開けて、中から魚のパックを取り出した。

「じゃあこれから、塩ジャケでも焼こうつと」

そして、晩ごはん本番。

昨日と同じように、テレビではニュースが流れ、食卓には2人分の皿が並んだ。

メインは焼きジャケ。その他に、納豆、トマトとコーンのサラダなどが並ぶ。そして塩ジャケの横には、生ぬるいニンジンのポタージュスープ。

梨々子はスープを一口口に含んで、そしてつぶやいた。

「うへええっ、ちよっと生っぽくない？ このスープ」

「ニンジンも茹でたんだろ？」と聡一。

「そうじゃなくって」

梨々子は聡一に向かつて、力説しはじめた。

「なんかさ、冷たい、とか熱い、とかハツキリしてよって感じなんだよね。私こういう中途半端って、キライなんだよね」

すると聡一は、納豆を皿の中でかき混ぜながら言った。

「じゃあさ、スープ、梨々子一人で飲んでいいよ」

梨々子は目を丸くする。

「なんで？ どういうこと？」

聡一は言った。

「だからさあ、冷たいのでも熱いのも、梨々子は好きなスープを飲めばいいよ」

そこで、初めて気が付いた。

何てバカだったんだろう？ 今まで気付かなかったなんて……。

そう梨々子は思った。

そして梨々子は、聡一に恐る恐る核心に迫る質問をすることにした。

「もしかして、聡一はスープがあまり好きじゃないの？」

聡一はヘラツと笑って答えた。

「ハハッ、実はそうなんだ」

ちよつとムツとした顔で、梨々子は聡一に喰ってかかった。

「じゃあ、ネコ舌っていうのはウソ？」

「ウソじゃないよ。僕は真正銘のネコ舌だ」

「冷たいのが苦手っていうのは？」

「それもウソじゃないよ。要するに極端な温度差についていけない体質なんだ」

梨々子は頭の中を、必死に整理しようとして、もう一度聡一にたずねた。

「ということとはつまり、ネコ舌で熱いのが苦手だから、スープもキライってことなの？」

聡一は照れたように、頭をかいた。

「まあ……そういうことになるのかな」

その次の瞬間、聡一がいきなり大声を出した。

おおっと！

梨々子が驚いて聡一を見ると、聡一はもはや梨々子を見ていない。

聡一の先には、テレビの画面。

「スポーツニュースがはじまる！」

そして聡一は、テレビを食い入るように見始めた。何か話しかけようか、と一瞬思った梨々子だったが、すぐに口を閉じた。梨々子は完全においてけぼりを喰らっていた。

一人寂しく塩ジャケをつつく梨々子。

やがて梨々子は、一人の世界に没頭していく。先程の一件を思い出し、梨々子は頭を悩ませはじめた。

ああ、まさか聡一が『スープ嫌い』だなんて。だけど私は、ご飯にスープは欠かせない。スープはあつて当たり前のもので、食べないと『ごはん』を食べた気になれない……。

結果、梨々子は自分なりの回答を導き出した。

聡一も一人でスープを飲んでいいと言っているんだもの。明日からは、私の分だけスープを作ろう。嫌いだという人に、ムリに飲んでもらう必要はないわ。面倒でも、そうしよう。

梨々子がぼんやりそんなことを思っていた時、聡一はまだ、スポーツニュースに夢中だった。仕方なく、梨々子は再び塩ジャケをつきはじめた。夕食はまだ、終わりそうになかった。

聡一は、スープが嫌い。

梨々子はスープなしではいられない。

だから、梨々子だけがスープを飲み、聡一にはスープを出さないというのは、一見理にかなっていた。それで2人の溝は埋まり、大

団円になるはずだった。

ところがコトは、そう簡単には終わらなかった。

しばらくすると、聡一が梨々子に不平を漏らすようになったのだ。

「これじゃあ、お腹一杯にならないよ」

ある晩ごはんの最中に、聡一がいきなり言い出した。

「梨々子、いい？ 理屈で考えてみてよ。食卓に並ぶ皿が一品減ったんだ。その分今までより、食べる量が減るってことだよな」

梨々子は、うんざりした顔をした。

「またその話？ 聡一もダイエットすればいいじゃない。だいたいスープはいらないうつたのは、聡一自身でしょ」

聡一も反論する。

「でもさ、僕はダイエットしなくて平気だよ。誰も僕のことなんか気にしてないし。そんなことより、僕は空腹が満たされたいんだ。お腹いっぱい食べたいんだよ」

聡一は梨々子に手を合わせた。

「なあ、この通り。もう一品おかずを何か増やしてくれよ」

「やだ」と梨々子。

「だいたい、体重も身長も違うんだぜ。男の僕が、梨々子より多くものを食べるのは当たり前じゃないか」と聡一。

「ばーか」と梨々子。そして言った。

「そんなにお腹がすいてしょうがないんなら、自分用に『おそうぎい』を買って来ればいいでしょ。私はもう、面倒見ないからね！」

梨々子にきつぱりと断られ、聡一はいつになく情けない顔で梨々子を見た。そして言った

「じゃあせめて、飯のおかわりくれよ」

「自分でよそつたらいいじゃない」

梨々子は冷たく突っぱねた。

テレビではスポーツニュースが始まった。しかし聡一はそれすら気付かぬ様子だった。

今日のおかずはタラのみそ漬け。梨々子は白身魚をつついては、

それを口に放り込んだ。聡一は自分のカラになった皿を、うらめしそうに眺めていた。やがてふとテレビに目をやった聡一は、しばらくすると野球のハイライトシーンに夢中になりだした。そして、先程のやりとりすら、忘れてしまったようだった。

ハハツ、子供なんだから。

梨々子は心の中で笑った。

やがてニュースが終わる頃、その日の晩ごはんは終わった。

梨々子は後片づけをはじめ、聡一はゲーム機に電源をいれた。ひとしきり遊んだ後、聡一は帰り支度をはじめた。しかしその間中、梨々子とは言葉を交わさなかった。そして黙って帰っていった。

あれから2日が過ぎた。

昨日梨々子は、電気量販店でバイトをしていた。だから聡一とは顔を合わせていない。学校でも見かけなかった。

電話をしようか、とも思ったが、なんとなくかけそびれ、そして何となく時間だけが過ぎてしまった。

2日間が経つうち、梨々子は少しだけ反省モードに入っていた。聡一にヒドいことをしちゃったかもしれない。明日、あやまるう。

だが、梨々子は相変わらず料理を一品増やす気にはなれなかった。だいたい聡一は、料理をなめている。その手間も、時間も、食材代も。何一つ分かっていない。

そこで梨々子は、素直に、いかに料理が大変かを聡一に訴える作戦に出ることにした。心を込めれば、聡一にだって伝わるはず。

ああ、これで全て丸くおさまってくれればいいな、と梨々子は思った。

そして夕食の時間が近づき、いつも通り聡一がやって来た。

聡一は相変わらず早い時間に来て、ゲームするつものようだった。た。

ピンポン。

チャイムが鳴り、梨々子が玄関のドアを開ける。
扉を開けたとたん、揚げ物の、ふんわりとした香ばしい香りが漂
ってきた。

もしま……。

梨々子は聡一に聞いた。

「それ……。その匂い……」

「ああ、心配しないで。僕の一品分しか買ってきてないから」と聡
一。

「コロッケ？」と梨々子。

「ぶぶー。今日はメンチカツ」

そして聡一は、嬉しそうに話をはじめた。「ここに来る途中に、
肉屋があるでしょ、『長谷川』っていう。そこを通るたびに、いい
匂いがするんだよね。いつか一度揚げたてを買ってみたかったんだ」
梨々子はムツとした顔でつぶやいた。

「あの肉屋のコロッケは、私も大好きなのよ」

「だからコロッケじゃなくて、メンチカツだってば」

「私はメンチカツも好きなの！」

梨々子は腹立たしかった。

むしろように何かに当たりたい気分だった。まるで頭の中に、毒
の沼地が広がっていくかのような。そしてそれを、鉄の棒でぐるぐ
るかき回しているかのようなだった。

その日の夕食は険悪だった。

梨々子は一言もしゃべらずに箸をすすめ、聡一は梨々子にちらち
らと視線を送りながらも、何を話していいか分からず、小さくなっ
ていた。今日はテレビもついていない。無音の食卓。

やがて聡一が口を開いた。

「あのさ」

「何？」梨々子が聡一をにらむ。

「メンチカツ、半分いる？」

おずおずと訊ねる聡一。

すると今までムツツリしていた梨々子の顔が、急にほころんだ。「いるいる」

聡一は、メンチカツを半分に切り分けながら言った。

「ゲンキンだなあ、梨々子は」

そして半分に切ったメンチカツの半分を、梨々子のご飯茶碗の上に、ドンとのせた。

「ソースいる？」

「うん、いるいる」

聡一が、お総菜用のソースパックを取り出し、パックの口を切つて、梨々子のコロッケの上にソースをかけた。梨々子は茶碗の上のメンチカツをさらに小さく切り分けて、その一つをとり口に放り込んだ。

「やっぱり、あそこの肉屋のは、最高だね」

「うん」

「メンチカツもいいけどね、コロッケもいいんだよ」

「うん」

聡一は、もぐもぐと口を動かしながら言った。

「それはそうとして、どうしようかな。これから」

「何のこと？」梨々子が聞いた。

「お総菜」

「お総菜？」

聡一はメンチカツを食べながら言った。

「だってさ、おかすが足りないからメンチカツを買ってきたのに、梨々子がむくれるんだもん」

梨々子は反論した。

「だって、コロッケ好きなんだもん」

「メンチカツだよ」

「メンチカツも好きなの！」

聡一は言った。

「そもそも、もう一品欲しいなら自分で買え、って言ったのは梨々子じゃないか」

「だって、目の前にドン、と出されたら、私だって食べたくなるよ」溜息をつく聡一。

「ま、いつか。なるようになれ、だ」

聡一は言った。

「でも、梨々子の機嫌が治って良かったよ」

「聡一の機嫌もね」

そして笑顔になった梨々子が、テレビのスイッチを入れる。

テレビでは、ちょうどスポーツニュースがはじまるころだった。

それから数日が経った。

聡一は相変わらず、夕食のたびに自分の分だけ『お総菜』を買ってきた。エビフライ、肉じゃが、春巻き、ギョウザ、シユウマイ、肉団子、などなど。日替わりで様々なお総菜が食卓に並んだ。それらは、聡一の前にだけ並び、梨々子はそれを見て、いつもむくれた。なにしろ普段は質素な食卓だ。健康を心がけ、梨々子が野菜の多い、魚メインの献立を立てたがるからだ。しかし聡一ときたら、匂いの強い、揚げ物や肉ばかり持つてくる。これはまるで梨々子にとつては拷問だった。

梨々子がムツとするのを見て、最後には聡一が折れた。そして聡一は惣菜を半分に割った。毎日はその繰り返しだった。

夕食時。

梨々子と聡一は向き合って「いただきます」と言った。

今日聡一が買ってきたのは、エビチリだ。

これまた梨々子の大好物だった。

「……」

いつものように、梨々子からの無言の圧力を感じた聡一は、ちょっと意地悪な口調で言った。

「食べたいの？」

こくこく。梨々子は何度もうなずいた。

「分かったよ。半分食べていいよ」

聡一がエビチリの中央に、箸で線を引いた。梨々子は嬉しそうに、エビチリを箸ですくった。

「いただきます」

そして2口目。梨々子は思わず、食べてはいけない領域にまで、手を伸ばしてしまった。「あ！」

聡一は見ていた。梨々子は聡一のブーイングを受けることになってしまった。

「半分ずつって言ったじゃないか。そもそもこれは、僕の『お総菜』だよ」

「えー。だって……」

梨々子は口をとがらせた。

「聡一には愛がないのね。こういう時、黙って見逃すのが本当の愛よ」

「『お総菜』を半分あげるのは、愛じゃないのかよ」

聡一は溜息をつき、そしてこう切り出した。

「あのさ、前々から言おうと思っていたんだけどさ」

真顔で話し始める聡一に、梨々子の箸は自然と止まる。

「そもそも僕は、僕の分の『お総菜』を、自分の食べる分量だけ買っているんだ」

なーんだ、そのことか。梨々子は心の中で思った。

「だけど僕の分を、梨々子は食べてしまう。それじゃあやっぱり僕のお腹は満たされない」

「つまり？」梨々子は聞いた。

「梨々子もお総菜が欲しいってこと？」

聡一が聞いた。

ズバリ言われた梨々子は、ドキツとした。そして、煮え切らない様子で言い訳をはじめた。

「そういう訳じゃないんだ。私はただ、目の前おいしいものを、

他人が食べているのを見るのがイヤなだけなの。そうよ、本当はお総菜なんか……」

「食べたくないってこと？」と聡一。
うーん……。」

梨々子は悩んだ。

「やつぱりさ、1人分だけ買ってくるってのは、ダメだよ。平等じゃないよ」

「だけど、僕はスープを飲んでないよ」

聡一が言った。

「そもそもお総菜は、スープの代わりじゃないか」

梨々子は必死で反論する。

「お総菜はスープの代わりになんか、ならないよ。だって、『お総菜』と『スープ』のおいしさは、ベクトルが同じじゃないんだもん」

聡一は、再び溜息をついた。

「分かった。『お総菜』、今度から2人分買ってくるようにする。2人とも幸せなら、それでいいや」

聡一が、最後に折れた。

梨々子は複雑な気分だった。

本当のことを言うと、『お総菜』のせいで、お腹は一杯一杯だった。目の前にあれば、おいしそうなので食べたい。だけど、それを食べれば、お腹は腹八分目を越えて、満腹状態になってしまう。

今はまだいい。

1個のコロッケを半分に分けているうちは。

だがこれからは、『一人前』。コロッケなら1個。唐揚げなら2個3個。確実に食べる量は、今より増える。

それは健康にも、体重的にも、あまりいい状態とは言えなかった。だが、聡一にはそのことを言い出せず、梨々子は黙りこんでしまった。

いいのか？

本当にいいのか？

そんな言葉が梨々子の頭の中を、行ったり来たりした。
だが、これで大団円だと梨々子は思った。
もう終わり。

これで食卓に平和が戻ると、梨々子は信じることにした。必死に
信じ込もうとしていた。

「太ったね」

聡一はあっさり言う。

しかもストレートに。

この男、女心を知らなすぎると、梨々子は思った。

あれから1ヶ月。梨々子の体重は徐々に増え始めた。そして確実
に、目に見える形であらわれ始めた。

ああ、バカだ。私は馬鹿だ。馬鹿者だ。誘惑に負け続けた結果が、
こんな形であらわれてしまうなんて……。

梨々子は急に悲しくなった。引き金を引いたのは、聡一の言葉だ。
聡一にも見える形で「太った」ことが、悲しかった。梨々子は思わ
ず聡一に愚痴をこぼしはじめた。

「そんなに率直に言うこと、ないでしょ。分かってたわよ。私だっ
てそうなることぐらい。でもさ、でも……」

愛がないよ、聡一は。

そう言おうと思って、梨々子は口を閉ざした。

そうだ。

そもそも、スープのせいだ。

スープを「飲む」、「飲まない」からはじまり、その結果は、な
んだかサイアクな方向へ進んでしまった。ただこのまま続けば、
もっと悪い方向へ…… 確実に体重は増えていくだろう。

どこかでブレーキをかけないと。

でも、どうやって？

夕食を変えないと、多分何も変わらない。でも、いい方法なんて
これ以上思いつかない。

梨々子の頭は、回らなかった。何も、思いつかなかった。ふと、聡一が梨々子の頬に手をやった。

「泣くなよ」

聡一はそして、梨々子を抱きしめた。

「バカだなあ。こんなことぐらいで泣くなんて」

「なんでよ？」抱きしめられながら、梨々子は怒った。

「『こんなことぐらい』と思っているの？ ヒドイ。太ったのは私よ！」

すると聡一は梨々子の頭をなではじめた。

「梨々子は一人で、いろいろ悩んでいたんだね。僕は知らなかったんだ」

そして梨々子を抱きしめたまま、聡一は言った。

「……そうだ、2人で何か、いい方法を見つけよう」

聡一は続けた。

「まずは『お総菜』を買うのをやめよう。それから……」

「それから？」と梨々子。

「それから梨々子は一人でスープを飲むのをやめる」と聡一。梨々子が驚いて聡一を見ると、聡一は梨々子を見て微笑んだ。

「僕もね、また梨々子のスープを飲むことにするよ」

「えっ、何で？」

梨々子は聞いた。

「だって、スープは嫌いなんですよ」

「うん。だからスープを出された時は、最後に飲んでいたんだ。ネコ舌でも大丈夫なように」

そして聡一は言った。

「スープはそんなに好きじゃないけど、梨々子は好きだよ。だから、梨々子のつくったスープも大好きなんだ」

「ありがとう」

梨々子は、泣き笑いをしながら聡一を見た。すると聡一は、「でもね、1つだけ言いたいことがあるんだよ」と言った。

「何？」

聡一が真面目な顔で梨々子を見るので、梨々子はドキリとした。2人の距離が近すぎるのだ。梨々子も聡一を見つめる。そして言葉を待った。

聡一が口を開いた。

「そのう……。焼き魚にポタージュスープは似合わないと思うんだ。焼き魚には『味噌汁』がいいと思うよ」

梨々子は思わず吹き出した。

「私もね、本当はそう思っていたんだ」

「じゃあ、今度の夕食には、『味噌汁』を作ってよ。具はね、キャベツとジャガイモがいいよ」聡一が言った。

それを聞いた梨々子が、言い返す。

「邪道よ。キャベツとジャガイモなんて。やっぱり『味噌汁』は豆腐とネギよ」

2人は笑った。

今日こそは、大団円だと梨々子は思った。さて。

今日の『晩ごはん』は、何にしよう？

だが、スープだけは決まっている。『味噌汁』だ。具は冷蔵庫と相談して後で決めよう。

梨々子の頭の中は、今日の晩ごはんのことで一杯になった。頭の中で、様々なおかずレシピが浮かびはじめた。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4239c/>

スーブ嫌い

2009年3月24日10時20分発行